

(仮訳)
北極科学サミット週間 (ASSW) 2015
宇都隆史外務大臣政務官御挨拶

ご列席の皆様,

外務大臣政務官の宇都隆史でございます。外務省を代表して一言御挨拶申し上げます。初めに、高円宮妃殿下の御臨席の下、名だたる北極研究者や関連機関の代表者の参加を得て、北極科学サミット週間を日本で開催できることを心から喜ばしく思います。

皆様よくご存知のとおり、北極では今、地球温暖化に起因する環境変化が急速に進んでいます。我々の関心は、北極海航路の利活用や天然資源の開発といった新たな機会に向かいがちですが、温暖化の加速化や海洋酸性化、人間活動の拡大が北極の脆弱な自然環境に与える影響等、課題もまた生じていることを忘れるべきではありません。北極圏内のみならず、地球環境全体にその影響が及び得るという意味で、北極における環境変化は、地球規模課題の一つと言えましょう。

日本は、国際協調主義に基づく「積極的平和主義」を掲げています。これは、地球規模課題の解決に向け、これまで以上に積極的に取り組む決意の現れです。北極における環境変化がもたらす課題への対応も、当然その例外ではありません。

では、具体的に我々はどう取り組んでいくべきなのか。2つの重要な挑戦が存在するというのが日本の考えです。それは、第一に、北極圏における環境変化の実態とその地球環境全体への影響を科学的に解明し、変化を正確に予測し、対応策を導き出すこと。そして、第二に、北極圏の適切な経済的利用のあり方について、国際社会の

共通理解を打ち立てることです。

この2つの挑戦に応えるために必要な要素が、「科学」と「国際協力」です。北極について実のある議論を行うためには、科学的なデータが不可欠です。しかし、先ほど藤井文部科学副大臣が端的に指摘されたとおり、解明すべき謎は数多く、そして一つの国ができることには限界があります。広範な国際協力が必要となる由縁です。

世界中から北極研究者が集まり、北極研究に関する分野横断的な協力について議論する ASSW は、まさにこの「科学」と「国際協力」の必要性に応える大変重要な会合です。特に、この後開催される、第3回国際北極科学計画会議（ICARP-Ⅲ）では、今後10年間の北極研究の方向性が示されると伺っております。北極における環境変化に対する国際社会の取組に、「科学」がますます大きな役割を果たすことを祈念して、私の御挨拶とさせていただきます。

御清聴、ありがとうございました。